

水無月

2025. 6. 2

6月になった。水無月である。水無月とは、旧暦の6月をさす月の異名、和風月名である。1月から12月を数字で見ると、味気ないというか、単純に順番を表しているものと解してしまう。ところが、3月の弥生、10月の神無月、12月の師走など、別の名で見てみると、また違った味わいが出てくる。

なぜ10月は、神が無い月なのか。12月は、どうして師が走るのか。同様に、6月といえば梅雨なのに、なぜ水が無い月なのか。こういった疑問が出てくる。

水無月は、現在では新暦6月の別名とされているが、本来は、新暦とは1～2か月のずれがあり、7月上旬から8月上旬にあたる。水無月の由来は諸説ある。水無月の「無」は「ない」ではなく、連体助詞の「の」であり、水無月＝水の月であるとする説がある。広辞苑を開いてみた。「水の無い月」ではなく、「水の月」の意味で、「水を田に注ぎ入れる月の意」とある。そうだったのか。

旧暦6月は、季夏とも呼ばれる。他にも、風待月、常夏月、青水無月、鳴神月、葵月、涼暮月、松風月などの様々な異称がある。

梅雨の時季には、雨が多く、気分が晴れないイメージがある。しかし、雨が降るべきときに降ってくれないと困ることもある。果物や野菜などの農作物、そして何よりも空梅雨だったりすると、ダムの水位が下がっていき、途端に水不足に陥る。まさしく水無月となってしまう。

ここ数年というか、もうだいぶ経つが、異常気象といわれていた頃から気候が極端になってきた。雨が降るのはいいが、大雨となり水害が発生する。雨が全く降らず、ダムが干上がってしまう。ほどほどということがない。降りすぎる。暑すぎる。人間のわがままなのかもしれないが、毎年のように大雨による災害が起こると、ついつい考えてしまう。何とかならないものなのか。こういったとき、人間の無力さを思い知らされる。

あれこれ心配するよりも、大雨による災害は起こるものとして、その対策を考えておくべきなのであろう。6月は、水無月ではなく、水の月である。水と付き合っていく月である。地震も怖い、水がもつエネルギーも恐ろしい。水はなくてはならないものである。なければ生きてはいけない。人類には、水をコントロールしてきた歴史がある。

幼稚園に、1月から12月の異称、すなわち、睦月、如月、弥生、卯月、皐月、水無月、文月、葉月、長月、神無月、霜月、師走をすらすらいってしまう園児がいる。6月は雨が多いのに、なにゆえ水無月なのか。教えたいが、もう少し園児の成長を待つことにする。今年の水無月は、ほどよい水の月となるだろうか。